

ひとひとのフォーラム足利2015 第2部



パネルディスカッション ~家族という希望~

パネルディスカッション

パネリスト

映画「ぼくたちの家族」

原作者 **早見和真** さん

監督 **石井裕也** さん

プロデューサー **永井拓郎** さん

この映画にかかわらずれたきっかけは。

永井●若い世代から見た家族を描いた原作がとても面白いと感じて、映画化を打診しました。若い監督でやりたいと思い、鋭い感性で家族を扱った映画を多く手がけられていた石井監督に依頼しました。



永井 拓郎 さん

早見●単行本は2011年3月11日発売ですが、震災になって最初の一週間は流通さえもしない状況で、誰の目にも

も触れられなかったという印象でした。家族というものに対する期待、希望、不満、絶望も全部書いて世に問うたつもりでした。永井氏を信頼していたので、作品を預けました。

僕の「家族という希望」で描いたテーマ性と石井監督の描いてきた家族像は一致すると思いました。

石井●最近原作の小説や漫画を渡されることが多く、しばらくの間放っていました。手にして読んだ時に「まるで自分のことを書いてる」と思えました。僕もこれに近いような経験をしていたので。「どうして自分が撮らなくては」と思いました。

この作品は、早見さんのお母様がお元気な時に書かれたものですか。

早見●2008年6月「ひゃくはち」で作家デビューしました。当時、母は58歳位で元気でした。一年後の秋、ある日突然物忘れがひどくなり、アルツハイマーかなと思いました。余命一週間を告げられ、一度正気を取り戻した母は「私のことを小説の中で書きなさい」と言いました。編集者に相談したところ「10年間寝かせた方がよい。渦中の君が書いても、おそらく書けないよ」と言われました。しかし、10年後にこの話を書いたら、

きっと家族を美化し、自分も美化するという確信がありました。

早見さんは、実際は一人っ子なのに映画では二人兄弟なのは何故ですか。

早見●僕は一人っ子なんです。自分の中のジキルとハイドを分けたイメージなんだと思います。

石井●自分自身をもう一人の自分が見つめているという感覚はすごく理解できます。

キャストリングは誰が決めましたか。

永井●映画によりケースバイケースですが、今回は石井監督の希望がメインでしたが、ほぼ同感でした。

家族をテーマに選んだ理由は。

永井●明確な理由はありませんが、早見さんがご自分の体験談を書くことが必要だったと思います。早見氏の3作品目の小説ですが、面白さと重みを感じました。

早見●この本を書いて初めて父親としゃべるようになりました。それまで、父親としては恨んでいましたが、すごく人として魅力的な男で、友達だったら仲良くなっていたらと思うことになりました。2014年5月

に公開され、その打ち上げの場に永井氏が家族を呼んでくれました。その時、父親役を演じてくれた長塚さんと自分の父親が握手している光景を見て、すごくいい絵だなと思いました。

今回の「家族という希望」とテーマについてどう思いますか。

石井●家族とは何だと問われても明確な答えは出ないと思います。これは、家族とはこういうものなんだということを表明する映画ではないし、答えがないからこそ向き合っべきだと思えます。たまに来るんですよ、向き合わなければならぬ瞬間が。普段は問題を先送りにして、目をそらして生きているわけです。この映画をきっかけとして自分の家族について点検作業して欲しいと思います。

早見さんのお母様が病気になられた30代という年齢はどうでしたか。

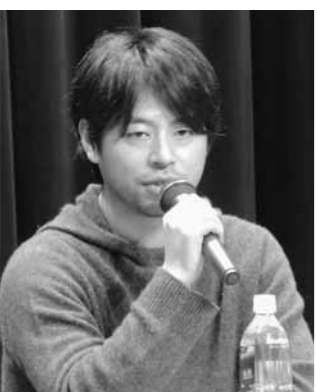
早見●当然の事できついことでした。特別なことが、自分が一番不幸だとも思わなかったです。たまたまこのタイミングで来ただけであって、でも、来て欲しくなかったです。張り詰めたまま小説を書き始めて完成させて世に出して石井監督たちに手



早見 和真 さん

この映画をどう売ろうかと相談しましたか。

早見●連載は「ピース」、単行本で「砂上のファンファーレ」というタイトルにしました。しかし、もう一度皆で考え、映画で「ぼくたちの家族」にしましたが、正直今でもこれが正しいタイトルなのかも分かりません。石井●僕もそうです。一言で明確に表すものを生み出せなかったです。「家族とは何かを知っている」人がいれば良かったかもしれないが。最近はこちらの方が求められる風潮になってきています。小説や



石井 裕也 さん

映像のまち構想を打ち出し、ロケ地として、昨年は50前後の作品に係った足利市に対して、一言お願いします。

永井●とても撮影しやすいです。ご担当の方が良い環境を整えてくれて、都心からのアクセスも良いですし、特別な建造物だらけではないので、どんな作品でも撮影しやすいですね。

石井●僕は「人」と思っています。優秀なボランティア、楽しく仕事をしてくれるボランティアと一緒にいられることは喜びで、この人と作品を作れてよかったと思えることは一番重要です。終わった後でも人間関係やつながりができてくれると嬉しいやすくなり、また撮影がしたくなります。

映画「ぼくたちの家族」

早見●まさに「人」その通りだと思います。また行きたいと思える、行かざるを得ない環境を作った方が得だと思えます。(T・K)(H・G)

平穏な日常が、まるで砂で出来た城のように「母の病」をきっかけに崩れ、そして隠されていたそれぞれの本音、秘密が明らかになっていく…。威厳を失いつつたえる「父」。精神的、金銭的にも頼られて、自身の家族との板挟みに苦しむ「長男」。状況を客観視しつつ、ありのままの母を受け入れようとする心優しい「次男」。それぞれの心の葛藤、苦しみもぐくどん底から見出したものは、「悪あがきをする」ことだった。そう決めてから、バラバラだった家族が一致団結して、それぞれ今できることを見つけ、母のために動き出していく。これは物語ではあるが、誰にでも起こりうるリアルなシチュエーションです。それぞれの登場人物に思いを重ね、家族のありかたを考えさせられ、また、一番小さな社会である「家族」に希望を見いだせる秀作です。

(T・M)